

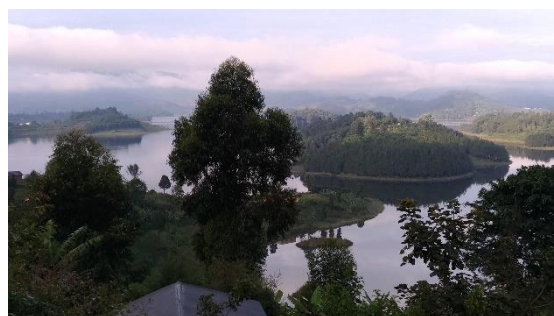
## カンパラ通信～ナカセロの丘から

### 第39回 ブニョニ湖の思い出

前回はダークツーリズムということで文字通り暗い話をさせていただきました。そこで今回は口直しに明るい観光話をしたく思い、本年2月初旬に訪れたブニョニ湖とその湖畔にあるブニョニ・ロック・リゾートに宿泊した体験をご紹介します。このブニョニ湖畔に泊まることになったのは、「草の根・人間の安全保障資金協力」(カンパラ通信第8回を参照して下さい。)の資金協力によりウガンダ南西部の二つの女子中等教育校に建設された女子寮の引渡式に来賓として出席するという出張があったからです。1泊2日の出張でしたので、二つの学校から共に近いところにあるブニョニ湖畔のロッジに泊まることにしました。



(風光明媚なブニョニ湖)



(島影も映るブニョニ湖)

ブニョニ湖は、ウガンダの南西部、ルワンダとの国境に近いところに位置していて、縦に25kmに伸び、横幅が7kmで、面積が46平方km(猪苗代湖103平方kmの約半分)となっています。湖は海拔1962mととても高いところに位置しています。ブニョニとは現地語で「小鳥がいるところ」という意味だそうです。湖は山の合間の峡谷に水が貯まりできたようで、形は複雑、湖面には29もの島が浮かんでいます。

走る道が舗装されてないこと、周りの家が粗末なことそして道を歩いている人の肌の色が黒いことを除けば、瀬戸内海の海岸沿いに島を眺めながらドライブしているような気持ちになります。ここブニョニには橋こそありませんが湖畔をドライブしながら見える景色には日本で人気の高い「しまなみ海道」と似たような雰囲気があります。湖畔を囲むように進む赤土の道路から見られる景色は一瞬一瞬変化して湖上の島や対岸の山の斜面が違って見えるところが面白いです。

その様な面白さを利用して湖畔にはたくさんのホテルやホステル、さらにはキャンプ地といった宿泊施設が連なっています。また、湖に浮かぶ島の中には宿泊施設があるものもあり

ます。ウガンダの観光地は通常は野生動物をたくさん見ることができるサファリや希少なマウンテン・ゴリラやチンパンジーといった霊長類をトラッキングするといった野生動物との邂逅を売り物にしています。しかし、ここブニョニ湖はそういった野生の動物は見られない点が他の観光地と大きく異なります。ブニョニ湖は風光明媚なところとしてウガンダ人にも人気の観光地です。また、ブニョニ湖周辺は野生動物がいながらも欧米人旅行者に人気非常高的のです。景色がきれいで静かな佇まいでゆっくり過ごすことができる大きな魅力というのが理由のようです。しかし、さすがにこの静かできれいな景色のためだけに大陸を越えて観光客が遠くウガンダ内陸まで来ることは考えにくいところですね。その疑問の正解は、ちょっと無理すればここブニョニ湖からブウィンディ国立公園のマウンテン・ゴリラ・トラッキングの旅へと足を伸ばすこともできるからなのです。しかしながら距離にして 80km 以上の悪路を 3 時間くらいかけてブウィンディ国立公園行かなければなりません。そのため午前 5 時の真っ暗闇にブニョニ湖を出発する必要があります。目的がマウンテン・ゴリラだけならばブウィンディ国立公園のそばに宿舎はいくらでもあります。マウンテン・ゴリラを近くから見るだけでなくブニョニ湖の美しい景色の両方を手に入れたいと思う欧米人観光客の気持ちが本当に良く分かる観光地でした。

ブニョニ湖でのアクティビティはというと、カヌーに乗って島巡りをしたり、ハイキングをして雄大なパノラマを楽しむというところです。ここにはビクトリア湖のようにカバやワニといった大型の動物もいなければ、住血吸虫もおりません。ただし、谷間に水が貯まってできた湖と説明しましたように、湖に入ると急斜面で深いので泳ぎが得意でない人は注意する必要があります。もうひとつこの湖の売り物が「アフリカで 2 番目に深い」ということです。宿泊するブニョニ・ロック・リゾートの受付の人はチェックインする時にこの点を 2 度も強調して教えてくれ、私の後にチェックインしていた人にも同じことを力説していました。Wikipedia によると最深部でも 40m(マリモで有名な阿寒湖で 45m) だといいますが、もっと深く 900m(ビクトリア湖で 80m) と紹介する文献もあるようです。この二つの数字の大きな違いに鑑みればアフリカで 2 番目というのはちょっと眉唾ものですね。因みにアフリカで一番深い湖はタンガニーカ湖でその深さは 1471m ということです。



(湖の対岸から臨むロック・リゾート全景)

次に私が宿泊したブニョニィ・ロック・リゾートを紹介します。幹線道路から未舗装の道を車で15分かけてドライブし湖畔に到着しました。そこから湖沿いに幾つものホテルやホステルを横目で眺めながらさらに奥へ奥へと進んでいきます。そのうち旅行者用の宿泊施設は滅多に見なくなりますが、それでも道の分岐点で「こちらがロック・リゾート」という標識が置かれおり安心しました。それでもどんどん進んで30分くらいしたところで（道が細くて悪いせいもあります。）、突然前触れもなく木材を立てた塀の一角に扉があり、そこがロック・リゾートでした。敷地内には駐車場はありません。ロッジの周辺にパーキングするしかありません。ロッジの受付係がのんびりとした感じでチェックイン手続きをしてくれ、バンガロー風のコテッジの部屋に案内されました。部屋は非常に大きく、ベッドも日本人なら一度に4人は寝れるくらいでした。コテッジは木造で暖かい雰囲気があります。湖に向けた壁は全面がガラス製なので見晴らしが良く明るくとても気持ちが良い作りになっていました。このように中心部から遠く離れていることもあり、灯は太陽光中心です。一方、シャワーはボイラーで水を熱して供給するというのでスイッチを入れてから5分以上待つ必要があると説明がありました。その通り5分程待ち、ようやくチョロチョロとしたお湯がでてきました。このような僻地でお湯が出るだけでも感謝しなければならないと心から思いました。夕食は受付兼食堂兼カフェがある棟の大きな木製テーブルで取りました。セット・メニューの夕食はオードブルと主菜とデザートそれぞれ3品から1品を選ぶスタイルで、幸いにも味はまあまあでした。しかし、サービスに時間がかかったのはウガンダならではのようです。WiFiのサービスは部屋には無くこの棟にしかありません。チェックインしていた時にはWiFiが使えましたが、夕食時には何故か機能していませんでした。食事が出てくるのを待つ間、インターネットを見ようと思っていたのがっかりでした。どうやら、このロッジではWiFiプロバイダー会社から事前にデータを購入し、泊り客にWiFiサービスを提供していたのです。問題はロッジのスタッフがそのデータを使い果たしたことを気付かなかったからでした。



(ロック・リゾートから臨む湖)



(ロック・リゾートのテラス)

夕食をとっている時から季節はずれのすごい雨が降り始め、スタッフが部屋まで戻る私にそうっと傘を差し出し、ゴム製の湯たんぽも持たせてくれました。周りはほとんど灯りが見えなかったのも、もし晴れている夜であったらどんなに星空がきれいだっただろうと思うと残念でした。いずれにせよ部屋にはWiFi サービスはないので、持参した現地の日刊紙を読み、その後は日刊紙娯楽欄の「Sudoku」をするという前世紀のような夜を過ごしました。部屋にはもちろんエアコンは無く、雨のせいか部屋の中は少し寒く感じたので、寝る時に湯たんぽを足にあて布団をかけましたらぐっすり眠ることができました。小学生以来の湯たんぽの感触を懐かしむとともにロッジのスタッフの気配りにも暖かさを感じた夜でした。



(バンガローの大きなベッド)



(室内のシャワー・トイレ)

翌朝、霧のかかったきれいな湖面を眺めながら着替えをし、朝食をとり、チェックアウトしロッジを後にしました。しばらく回りくねった道を走ったところで、突然道の脇に立っていた現地の人に車を止められました。何とその人はロッジのスタッフで、私に昨日来ていたワイシャツと現地紙を差し出したのです。私はそれらを今朝ごみ箱に捨てたつもりでしたが、ホテルの宿泊係はそうは思わず忘れ物をしたと思い、届けようとしてくれたのでした。ワイシャツは既に古く今回の出張で汗と泥にまみれるため、ごみ箱行きを想定していましたが現地紙は読み終え「Sudoku」の記入までであるのに・・・忘れ物を届けようと言うその気持ちに胸が熱くなりました。しかし不思議なことに、ロッジを出発してから1本道をどの車にも追い越されていないので、そのスタッフにどうやって私の車を待つことができたのかと尋ねました。「ボートを漕いでここまで来た」がスタッフの答えでした。そうこちらが昨晩の雨でぬかるんだ道をゆっくり車で湖畔を回りながら進んでいるうちに彼はモーターボートで湖を直行し適当なところで降りて崖を登って私の乗った車を待っていてくれたのでした！危険な崖を登ってくれたとは感激です！ところで、実はもう一つ「部屋の鍵を未返却」という大切な忘れ物があることに気づかされました。鍵は金属製でドアノブの錠を回して開閉するタイプで、部屋番号を記した板が付けられた昔風のものでした。スタッフに言われるまで全く気がつきませんでした。ポケットに入れたままの部屋の鍵をそのスタッフに手渡

し「ごめんなさい、さよなら。そして、どうもありがとう」と言いお別れし、近くの中  
等教育校で午前9時に行われる引渡式に出席するため車を進めました。

(了)